3　地域における青年活動支援の課題

ここでは、これまで明らかにしてきた青年の意識や行動の特徴を踏まえ、地域における青年活動支援の課題や留意点について指摘したい。

（1）地域活動への参加希望と実際のギャップ

①希望がありながら活動していない青年への着目

今回の回答者の場合、この1年間に地域活動を行った者は48.1%、今後、何らかの地域活動に参加したいと考えている者は79.1%で、経験率と希望率の間には30ポイント以上の差がある。経験率と希望率の大きなギャップは、今回の回答者の中に、希望がありながら活動していない青年がかなりいることを意味している。このタイプの青年は、今後条件が整えば実際に活動を起こす可能性が高いと考えられることから、地域活動を活発にするには、まずは、このタイプの青年を取り込むための方策を検討することが有効である。

現在のところ、一年間に地域活動に参加した者は半数に満たないが、たとえばこの青年層の半分が何らかのイベントや活動に参加するようになれば、地域活動への参加率は5割を大幅に超えることになる。そうなると地域の様子もずいぶん変わり、それによって、地域活動に興味・関心を示さない青年が影響を受けることも考えられる。

②希望がありながら活動していない青年の特徴と必要な支援

そこで、地域活動の経験の有無と希望の有無をもとに4つのタイプを設定し、特に希望がありながらこの1年間活動経験がなかったタイプ(「経験なし／希望あり」)に着目して、その特徴をさぐってみたい。表Ⅲ－3－1の通り、4つのタイプの中では「経験あり／希望あり」が42.8%でもっとも多く、「経験なし／希望あり」(36.2%)、「経験なし／希望なし」(15.7%)、「経験あり／希望なし」(5.3%)の順となる。この1年間に地域活動の経験

表Ⅲ－3－1　地域活動の経験・希望のタイプ

		該当者数	地域活動経験／参加希望				地域活動経験／参画希望			
			経験あり/希望あり	経験なし/希望あり	経験あり/希望なし	経験なし/希望なし	経験あり/希望あり	経験なし/希望あり	経験あり/希望なし	経験なし/希望なし
	合計	1,545	42.8	36.2	5.3	15.7	36.2	29.5	18.1	16.6
性別	男	844	43.8	30.7	6.3	19.2	39.6	26.9	19.4	14.8
	女	701	41.7	42.9	4.1	11.4	32.5	32.4	16.7	18.5
年齢	18～19歳	414	29.0	48.1	2.9	20.0	25.4	38.6	12.2	24.1
	20～24歳	484	40.7	42.1	2.9	14.5	34.2	36.4	15.0	15.2
	25～29歳	254	49.2	28.7	7.5	14.6	37.4	21.7	25.8	15.2
	30～35歳	393	56.0	21.4	9.4	13.2	49.3	16.1	23.4	11.5
職業	勤め(常勤)	491	47.3	27.5	8.1	17.1	40.1	23.2	23.4	13.6
	勤め(非常勤)	145	43.4	35.9	4.8	15.9	37.4	24.3	17.4	21.7
	自営業、自由業	101	75.2	8.9	11.9	4.0	67.1	8.2	22.4	2.4
	家族従事者	15	40.0	26.7	20.0	13.3	20.0	20.0	40.0	20.0
	学生	730	35.3	47.0	1.8	16.0	29.5	37.9	13.5	19.5
	専業主婦	24	54.2	16.7	12.5	16.7	41.2	11.8	35.3	11.8
	無職	16	18.8	50.0	6.3	25.0	18.2	54.5	9.1	27.3
	その他	6	33.3	33.3	16.7	16.7	25.0	25.0	25.0	25.0

はないが今後行ってみたいというタイプは、今回回答した青年の３分の１強を占め、４つのタイプの中で２番目に多いことになる。性別では女性（42.9%）、年齢別では 10 代後半（48.1%）と 20 代前半（42.1%）、職業では無職（50.0%）と学生（47.0%）に多い。

「経験なし／希望あり」のタイプの青年が地域で活動しなかった理由をみると、「忙しい、時間がない」（55.3%）の比率がもっとも高く、次いで「自分の興味にあう活動がない、時期や時間が合わない」（３９.2%）、「どのような活動があるのかわからない」（37.0%）、「きっかけがつかめない」（34.0%）などの順となる（表Ⅲ－３－２）。これらのうち、「どのような活動があるのかわからない」、「きっかけがつかめない」については、「経験なし／希望なし」のタイプよりも 10 ポイント以上高くなっている。「経験なし／希望あり」のタイプが行動に移す可能性を広げるには、この２つの阻害を解消するための取り組みがポイントになる。

表Ⅲ－３－２　地域イベント･活動に参加しなかった理由

	地域イベント･活動に参加しなかった理由											
	該当者数	忙しい、時間がない	同好の仲間がいない	費用がかかる	身近なところに参加できる活動が少ない	自分の興味にあう活動がない、時間があわない	どのような地域活動があるのかわからない	申込みや参加の手段がわからない	きっかけがつかめない	そのようなことに興味がない	その他	ＮＡ
全体	799	52.7	21.5	12.3	26.7	38.2	31.9	13.0	30.8	22.4	3.3	1.0
経験なし/希望あり	559	55.3	23.8	10.9	29.9	39.2	37.0	14.1	34.0	15.0	3.4	0.7
経験なし/希望なし	240	46.7	16.3	15.4	19.2	35.8	20.0	10.4	23.3	39.6	2.9	1.7

（２）きっかけづくり―大学・短期大学・専門学校との連携

今回の回答者の場合、地域活動に参加しなかった理由の中で、きっかけがつかめないことをあげる者が全体では３割を超えており、とくに 18~24 歳の層に多いことが明らかになった。上述のように、希望がありながら経験がないタイプでは、この比率はさらに高くなる。したがって、地域活動への参加のきっかけをつかめるように支援することが課題となるが、この理由をあげた者が多い 20 代前半までの青年のかなりの部分が学校に在籍していることを考慮すると、大学･短期大学･専門学校との連携が有効な方策の一つといえる。今日これらの学校の中には、自治体や団体と連携して地域活動を展開するところがあり、学生に対して地域での諸活動を奨励したり、授業のなかに地域活動の機会を組み込んでい

るところも少なくない。今後一層、学校との連携を強化して、地域活動のきっかけとなる機会を用意することが重要になるが、その場合には、学校の協力が得られやすいように、学校の教育課程との関連を考慮したプログラムの開発が必要になるであろう。

（３）情報提供の工夫

①情報を届ける

地域活動に参加しなかった理由の中で、「どのような活動があるのかわからない」をあげる者が全体では 3 割強、希望がありながら経験がないタイプでは 4 割弱を占めている。これについては、情報提供の問題として対応策を検討することができる。

すでにみたように、地域活動を経験した者の情報入手先の 1 位 2 位は「知人・友人」「所属しているサークル・団体」である。いわば身近な人やサークル等を通して、情報を入手し行動に移したものが多いことになる。そうであるとするならば、学校や職場、地域のサークルや団体に情報を届けることが必要であり、さらには、他者に情報を伝えたり、友人・知人を巻き込んで行動するような人に情報を届けることが有効であろう。青年層に身近なインターネットや携帯のサイトを通した情報提供についてもアクセスを待つだけでなく、メルマガに関連情報を掲載して情報を発信するなど、情報を届ける工夫が必要である。

②WEB 上での地域活動の企画コミュニティ

これまでは地域での活動・イベントに関する情報は、募集案内や活動報告が中心であった。このような案内情報や成果情報の提供が参加者の獲得に一定の役割を果たすことは間違いないが、今後は企画途中の情報についても提供する必要がある。

すなわち、地域活動のための企画コミュニティをインターネット上に立ち上げ、企画途中の情報を掲示板などに掲載し、コミュニティのメンバーがサイトにアクセスして意見を書き込み、担当者と一緒に企画を完成させるという方式である。企画コミュニティが青年のインターネットを介した地域活動への参加・参画の機会になるというだけでなく、これにかかわった青年の、イベントや活動への参加意欲を高める効果が期待できる。さらには、今回の調査で地域活動に参加意欲をもつ青年の約 7%が、インターネットなどを活用して自宅で参画したいと考えていることが明らかになったが、このような希望をもつ青年の参画機会を広げることにもなる。とりわけ、この方式は、出身地を離れて生活している青年を出身地とつなぐ手段の一つとなりえるであろう。

（４）参画意欲への対応

①青少年育成計画で指摘された社会参画の仕組みづくり・気運の醸成の必要性

前回調査（平成 8 年）に引き続き、今回の調査でも、地域でのイベント・活動への参加にとどまらず、企画や運営への参画を希望する青年が多くいることが明らかになった。ただし、地域活動への参画が自分自身の自己満足や人間関係の強化が目的になり、なかなか社会的な課題にまで関心が向かない傾向も見受けられた。

「青少年の健全な育成に関する基本計画」（平成 18～27 年度）では、青少年育成の基本的な考え方の一つとして「まわりの人たちと一緒になって新たな社会を作り出す資質や能力をかん養すること」が掲げられ、青少年の社会参加・参画とそれが可能になる仕組みづくりおよび気運の醸成の必要性が指摘されているところであり、今回の調査で示された青年の参画意欲が、新たな社会を作り出す基礎づくりにつながるように支援していくことが必要である。

②活動の面白さ

青年の地域活動への参加が継続されるには、活動に面白さを感じるための工夫が欠かせない。活動の面白さにもいろいろあるが、問題解決のプロセスをたどる面白さもその一つである。地域活動に関していえば地域課題の発見、課題解決のためのイベントや活動の企画、準備、実施・運営、活動評価・報告というプロセスをたどることの面白さである。いわば、地域活動に点でかかわるのでなく線でかかわることで得られる面白さであり、自分の経験や知識･技術が地域のために役立ったときに得られる､充実感を伴う面白さである。地域活動への参加・参画を自己満足や個人的な人間関係の強化にのみに終わらせないためには､このような面白さが感じられるための手法を取り入れることが必要になるであろう。

したがって、今後も、参画方式による地域活動の機会を用意することが必要であり、さらには、参画した者が活動を通して面白さを感じられるように、企画会議などをファシリテートできるリーダーや、そのための条件整備ができる活動の支援者が必要である。参加者の経験や知識・技術を引き出しながら、グループとしてのパフォーマンスを向上させる力量を備えた支援者・リーダーの育成が青年の地域活動充実の課題の一つである。

（５）多様な青年たちの参画による地域活動

近所に友人がいるか否かで地域活動への参加率に違いが生じている。今回の調査では、近所の友人が「いない」という青年が 3 分の 1 を占め、そのような青年の地域活動への参加率（38.0%）が全体の平均値（48.1%）よりも約 10 ポイント低い。また、地域活動に参加しない理由として「同好の仲間がいない」をあげる者が 2 割を超えている。一人で行動することが苦手で、何事も友人・知人と一緒という場合が多い今日の青年を象徴する結果ともいえる。

したがって、地域で新たな活動を始めたり活動を広げようとしても、一緒に参加する友人･知人がいないことが障害となって､人が集まらないということが考えられる。そこで、地域に在住しているかどうかにかかわらず、グループ単位で青年を受け入れ、地域の青年と一緒に活動に参画するといった仕組みや、進学・就職のために地域を離れた者が帰省した折に参加したり、インターネット等を活用して参加したりできるような仕組みを設けるなど、多様な青年が多様な方法で参加・参画する地域活動を考えることが必要なのではないだろうか。

（６）少年期の活動支援

青年の地域活動を活発にするためには、青年自身に直接働きかけ活動を支援するとともに、中学生や高校生の地域活動を支援することも重要である。

①ジュニアリーダーへの着目

これまで青少年教育や青少年育成の領域で継続的に行われてきた中学生や高校生対象の事業の一つに、ジュニアリーダーの育成がある。今回の調査対象者の中にはジュニアリーダーの経験者が６％強含まれていたが、彼らの地域活動への参加率は 69.5％で、全体の平均値（48.1％）を約 20 ポイント上回っていた。また、地域のサークルや団体での活動率は 44.2％で、これも全体の平均値（22.1％）を大きく上回っている。

さらに、今後の地域活動に対する参画希望の割合が、ジュニアリーダー経験者の場合、「子どもたちのための活動」で 22.4 ポイント、「スポーツやレクリエーションの催し」で 14.5 ポイント、「災害時のボランティア活動」で 12.8 ポイント、「お祭りなどの地域の行事」で 12.0 ポイント、「障がいのある人のための活動」で 8.9 ポイント、回答者全体の平均値を上回っている。

②将来の地域活動の担い手としてのジュニアリーダー

年齢の異なる友人の数をみても、5 歳以上年上の友人がいる者は 74.7％で全体の平均値（57.6％）を 17.1 ポイント、5 歳以上年下の友人がいる者も 51.6％で全体の平均値（39.1％）を 12.5 ポイント上回っている。このような数値を見る限り、ジュニアリーダーの経験が、18 歳以降の青年期の地域活動に影響を与えていると考えることができる。ジュニアリーダーの育成活動は、中学校、高等学校時代における成長発達、あるいは子ども会活動の活性化というだけでなく、将来の地域活動の推進者育成という観点からも重要である。

（７）継続的な調査活動の必要性

①調査の継続・実施

いうまでもなく、青年の意識や行動には変化する部分としない部分があり、今回の調査でも、その一端を明らかにすることができた。今後も、今回のような調査を継続的に行い、その時点での青年の意識や行動の実態を十分把握したうえで、地域活動支援上の課題を明らかにする必要がある。

ただし、今回のような県内の青年の意識や行動の全体像を把握するための調査を頻繁に行うことはむずかしいことから、現実には一定の期間を置いて実施せざるをえないであろう。そこで、その間を埋める上でも、対象や内容を限定した調査や、意識や行動の一部を把握できる資料等を収集して整理、分析することが大切である。

また、今回の調査は、県内に在住・在学・在勤している青年を調査対象としたが、進学や就職のために宮城県を離れて生活している青年の中には、宮城県や出身市町村等とかかわりを持ちたいと考えている者やかかわる可能性をもった者がいるに違いない。そのような青年たちの宮城県や出身市町村に対する思いや考え、かかわり方についての希望などを

把握したうえで、それらを巻き込んだ活動の在り方を検討していくことが必要ではないだろうか。

②調査の一連のプロセスへの青年の関与

今回の調査では、青年の代表が企画・実施・集計の各段階に参加したが、今後はさらに青年の関与の度合いを高める必要がある。調査活動を行政職員や専門家に任せるのではなく、それらの支援を受けながら、青年自身が主体的に企画し、準備・実施・集計・分析・報告の一連のプロセスを担うという進め方である。青年自身による地域の特徴や課題を把握するための調査活動が、青年の地域活動充実に向けた第一歩になる。